

連峯堂 彩り 秋号

RENPOUDO AUTUMN COLLECTION.

HP



Instagram



奥田連峯堂

TEL:075-561-3655

FAX:075-525-1148

営業時間：11時 - 18時

定休日：毎週水曜

〒605-0073 京都市東山区祇園町北側244

<https://www.renpoudo.com>

✉ renpoudo@mth.biglobe.ne.jp

1.

古清水 七宝透香炉

幕末 - 明治

径22cm 高さ19cm

七宝透かしと牡丹文様が描かれています。

「明治11年10月 古清水七寶透香爐 福田氏所持」
と記載された箱書きがあります。



2.

古伊万里 色絵草花図角瓶

江戸時代

口径2.5cm 胴径8cm 高さ18cm

濃い青色と深い赤色が全体を引き締めています。
四面にはそれぞれ草花や建物が金彩や色絵を用いて描かれています。
傷や直しは無く、状態が良いです。



3.

染付盒子

初期伊万里

江戸時代

径5.5cm 高さ6cm

小さな蓋付の容器（盒子）です。蓋は焼成時に崩れてしまったのでしょうか、獅子か狛犬のような形です。

初期伊万里は、1600年代前半に作られたと伝えられる、日本で最初の磁器、伊万里製品です。絵付けの前に素焼きを行わず、本焼きする「生掛け焼成」を用いています。そのため、温かみのあるしっとりとした風合いに仕上がります。



4.

洋紅釉雨龍花器

初代 真葛 香山

共箱

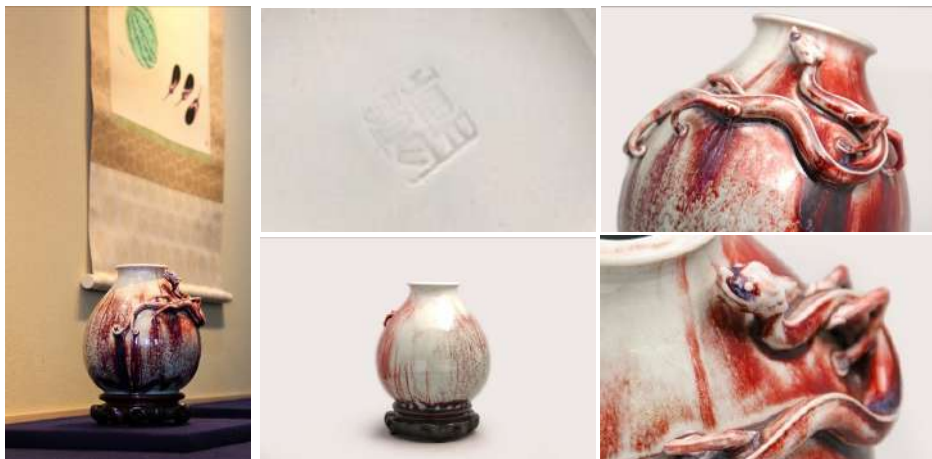
明治 - 大正

口径7.5cm 胴径16cm 高さ18cm

皇室技芸員

初代宮川香山は皇室技芸員の1人でした。皇室技芸員は、明治から戦前の昭和期において、宮内省によって運営されていた美術家や工芸家の顕彰制度です。

龍が象られた花器です。白い下地に鮮やかな赤色が目を引きます。雨龍はその名の通り、恵みの雨をもたらす水霊です。



5.

水釉蟹画花瓶

2代 真葛 香山

共箱

明治 - 昭和

口径12cm 胴径25cm 高さ20cm

蟹が少し盛り上げられて立体感のある写実的に描かれています。

花瓶は全体的に上から下にかけて、水色がグラデーションになっており、涼やかな印象を与えています。

2代 宮川香山は、帝室技芸員の初代香山を助け、優れた作品を残しました。板谷波山と並んで関東の美術界に君臨しました。



6.

花器

エミール・ガレ

20世紀

径10.8cm×9cm 高さ16.5cm

エミール・ガレは、19世紀末から20世紀初期にヨーロッパで広がった芸術様式「アール・ヌーヴォー」を代表するガラス芸術作家です。

ガレの自宅の庭園には2,000におよぶ植物園の様な多様な品種の植物を栽培していました。それらは、図案のモチーフとして観察し、参照されていました。

ガレの作品は、エジプトや中近東、日本をはじめとした東洋の美術品からも影響を受けました。

ガレのジャポニスムは、長年に渡り日本の美意識を深く理解した上で取り入れたひとつの要素でした。



7.

絵替菓子盆 20客組

南陽

径18cm 高さ1.3cm

様々な琳派風の文様が蒔絵されたお盆です。4組のみ同じ図柄になっており、16種類20客のお盆です。作者の南陽につきましては、詳細は不明です。





2客あります



2客あります



2客あります



2客あります

8.

古染付 松竹梅文五寸皿 5客組

中国 明時代末
径17.5cm 高さ3cm

中国 明時代末の古染付のお皿です。
見込みの真ん中が少しだけへこんでいる形のお皿です。
松竹梅が描かれています。
高台内には「大明成化年製」銘があります。
1客のみ縁の文様が少し違います。
1客の高台にトリアシのようなニューが見られます。
表にも地割れのようなものが見られますが、表には通ってないようです。
東京国立博物館図版目録に類似品が掲載されています。



9.

青交趾手桶向付 5客組

永楽 即全 (16代 永楽 善五郎)

共箱

昭和 - 平成

径14.5cm 高さ14.5cm

外側は青交趾、内側は黄交趾になっている手桶の向付です。
蓋は、塗りの割蓋になっています。表には三日月が描かれ、
裏側には在原業平の和歌が書かれています。



10.

金霧彩色絵鷺文提酒器

坪島 土平

共箱
昭和 - 平成
径22cm 高さ17cm

側面に紫色で鷺が描かれています。高台に窯キズが見られません。高台に「土平」の彫銘があります。

「東の魯山人・西の半泥子」と称された川喜田半泥子の弟子である坪島土平による作品です。坪島土平は、三重 津市の広永窯において作陶しました。色絵や染付などの作品の他にも、志野、織部、朝鮮唐津と作風の幅が広いです。



11.

金霧彩象嵌水辺文蓋物

坪島 土平

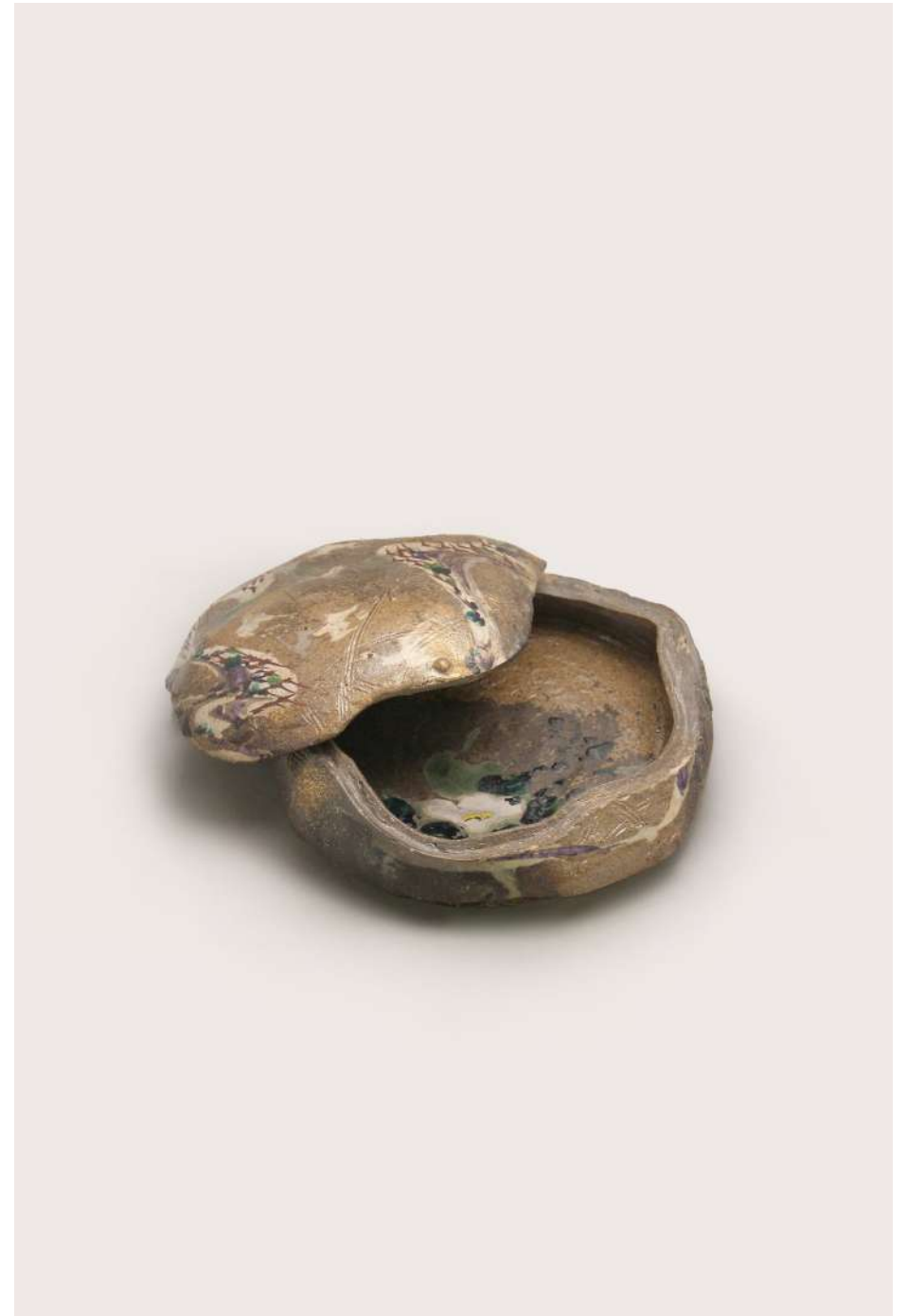
共箱

昭和 - 平成

径25cm 高さ10.5cm

大変ユニークな作品です。水辺の様子が土平らしい筆致で描かれています。内側や蓋の裏には椿が描かれています。高台内に「土平」の彫銘があります。

「東の魯山人・西の半泥子」と称された川喜田半泥子の弟子である坪島土平による花入です。坪島土平は、三重 津市の広永窯において作陶しました。色絵や染付などの作品もありますが、志野、織部、朝鮮唐津と作風の幅が広いです。



12.

ラスター彩遊鹿文大皿

加藤 卓男

共箱
昭和 - 平成
人間国宝
径40cm 高さ9.5cm

ラスター彩は9世紀にメソポタミアで始まり、14世紀以降に衰退してしまい、幻のペルシア陶器と言われている技術です。金属的な光沢が特徴です。そのようなラスター彩に加藤卓男は魅入られ、復元を志し、残りの人生を賭け、試行錯誤の結果、復元に成功しました。中央に鹿が描かれ、それを囲むように鳥や魚などの動物が描かれています。全体的に貫入が入っています。



13.

染付獅子香炉

近藤 悠三

共箱

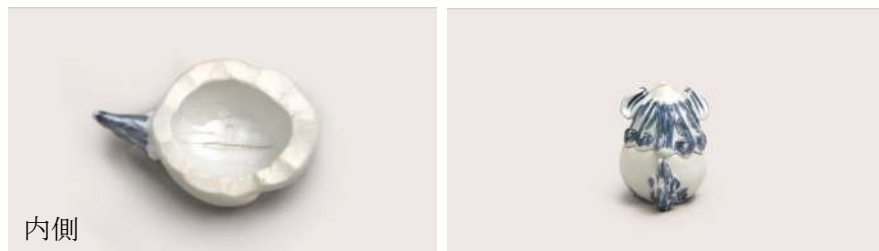
昭和

人間国宝

径7cm×4.5cm 高さ6.5cm

大変愛らしい獅子の形をした香炉です。
頭と胴で分かれ、口の部分が透かしになっています。
内側に窯キズがありますが、表には通っておりません。

近藤悠三は、京都清水寺門前茶わん坂に生まれ、富本憲吉の
助手を経て、染付技法で人間国宝に認定されました。



内側



14.

堆瓷梅花文方壺

松井 康成

共箱

昭和

人間国宝

口径3.5cm 胴径15cm×10.5cm 高さ17cm

松井康成は長野県に生まれ、その後、茨城県笠間市の月崇寺に窯を築きました。日本をはじめ、中国・朝鮮半島の古陶磁を研究しました。その中でも、異なった色の土を混ぜることにより模様を表現する練上の技法と出会い、生涯にわたりこの技術を追求しました。試行錯誤の末、象裂・堆瓷・晴白などの様々な技法を新たに開発し、人間国宝に認定されました。高台に「康」の銘が有ります。



15.

呉須刷毛目鉢

河井 寛次郎

河井つね極箱

昭和

径27.5cm 高さ5.5cm

泥刷毛目とは、意に染まない筒描をやり直すために生乾きの泥漿を布で拭いた際に、偶然拭き後に残った激しい荒波の様な模様の面白さに気づいたことから生まれた寛次郎独創の技法です。呉須の色はその深い藍色の中に渦巻く盛り上がったうねりが躍動感を表現しています。このエネルギッシュな表現は無作為であるかのように見えて、寛次郎の確かな意志をもって見る者に迫ってくるようです。



16.

黒釉指描扁壺

濱田 庄司

共箱

昭和

人間国宝

口径3.5cm×3cm 胴径9cm×15.5cm 高さ22.5cm

黒釉と白釉が掛けられ、その上から指描きの技法を用いて文様が描かれています。指で文様を描いた作品は濱田庄司の代表的な技法のひとつと言えます。単純ですが、ひとつとして同じ模様にならないという偶然性の魅力があります。



17.

柿釉赤絵茶碗

濱田 庄司

共箱
昭和
人間国宝
径10cm 高さ10.5cm

柿釉の茶色の地に、緑と赤で幾何学的な文様が描かれています。

胴の中ほどには、胴部に紐を巻いたように一段高く成形する胴紐が見られます。

同じ文様を用いた茶碗が「大阪市立東洋陶磁美術館所蔵 堀尾幹雄コレクション 濱田庄司」図録に掲載されています。

濱田庄司は「京都で道を見つけ、英国で始まり、沖縄で学び、益子で育った」と自ら評しています。益子に居を定め、実用性を重視した健やかで堅実な作風の作品を数多く残しました。その後、人間国宝になりました。また、柳宗悦や河井寛次郎と共に民藝運動を始めました。



18.

黒釉方瓶

バーナード・リーチ

共箱

1968年

口径8.5cm 胴径17cm 高さ37.5cm

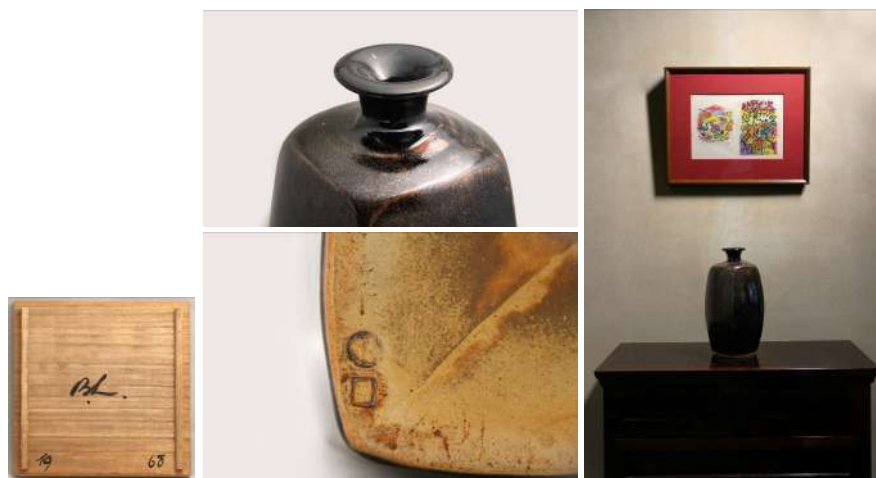
大変大きな壺です。

高台にBLとリーチポタリーの印があります。

共箱には、「B.L. 1968」と書かれています。

「東と西の出会い 生誕125年 バーナード・リーチ展」図録に類似品が掲載されています。

リーチは、香港生まれの英国人です。幼少期は日本で過ごし、その後、英国に帰国しました。そして、日本への憧れから再来日しました。一緒に英国で窯を築いた濱田庄司をはじめ、柳宗悦、河井寛次郎、富本憲吉などと交流し、同志として民芸運動にも参加し、影響を与えました。



19.

額装 陶板 「水辺」

深見 陶冶

共シール

昭和 -

額：縦45cm 横54cm

水辺にトンボが飛んでいる様子が青白磁のやきもので表現されています。その陶板が額装されています。

深見陶冶は、国内の東京国立近代美術館などはもとよりアメリカのメトロポリタン美術館をはじめ、作品が所蔵されており、国際的にも高い評価を受ける陶芸家のひとりです。



20.

額 ガラス絵 「布をかけた椅子」

芹澤 銈介

昭和

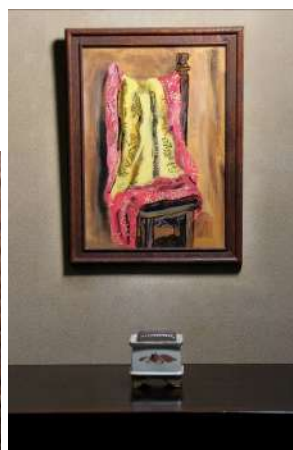
人間国宝

額：縦45cm 横34cm

ガラス絵とは、透明な板ガラスの裏面に、泥絵の具や油絵の具によって普通の絵と逆の順序に描き、表面から見る仕組みの絵です。

芹澤銈介は、染色家として活躍しましたが、幼い頃の夢は画家になることでした。ガラス絵などの肉筆作品は、型絵染作品と並んで評価を得ています。

芹澤銈介は、収集家としても著名で、静岡にある芹澤銈介美術館には4,500点に及ぶ世界の工芸品が収蔵されています。家具のなかでも芹澤が好んだのが椅子だったようです。ヨーロッパやアフリカの椅子を中心に、多数の椅子を集め、常に取り替えながら周辺に置いていたそうです。本作品で描かれている椅子もお気に入りの椅子の一つなのかもしれません。



21.

額 型染 「如」

芹澤 銈介

布地
共シール
昭和
人間国宝
額：縦76.5cm 横57cm

「如」の文字絵が描かれています。文字絵とは字模様とも言われ、文字を文様化した図案です。芹澤は、文字の造形に強い関心を持ち、初期から晩年まで、大小たくさんの文字作品を制作しました。芹澤銈介全集 第21巻に類似品が掲載されています。芹澤は、沖縄の染色技法である紅型と出会い、染色家の道へ進みます。分業で行われていた工程を、一人で行うという新たな染めの形を作りました。その染色技術と染め上がった文様の美しさが高く評価され、型絵染の技法で人間国宝の認定を受けました。



22.

額 火の願ひ

棟方 志功

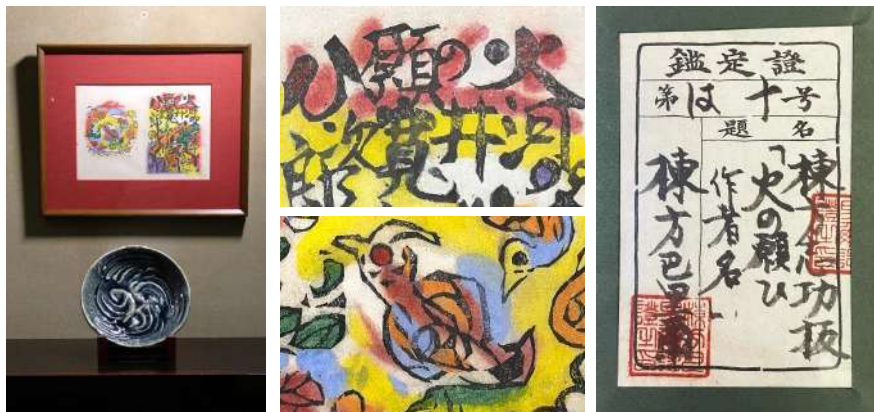
棟方巴里爾 鑑定證

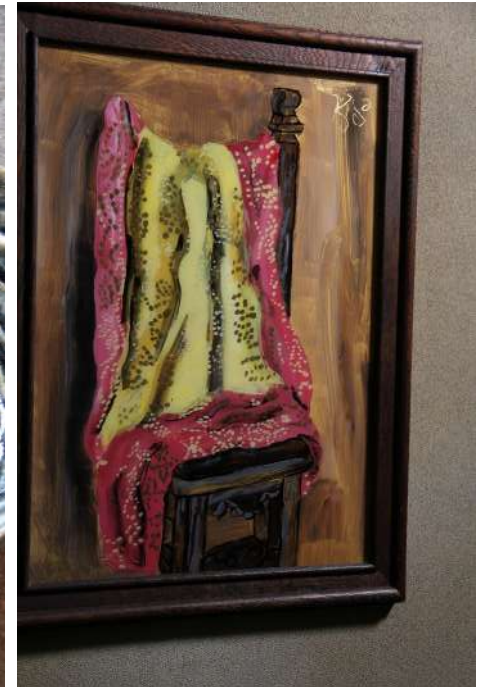
額：縦44.5cm 横55.5cm

火の願ひは、河井寛次郎の詞集「いのちの窓」に含まれる詞を板画に彫り、手摺り、手彩色、手綴じの本として刊行した板画本です。本作品は、その板画本の中のひとつの詞と絵を額装したものです。絵と詞に直接的な関連性はなく、モチーフは多岐に渡っています。

摺りは石崎俊彦が行っています。石崎は、福光町立図書館の司書であり、疎開前から棟方と交流があり、疎開後はたびたび棟方の元を訪ねるようになります。富山県立高岡工芸高校で学び、日本画家の石崎光瑤の内弟子として学んだこともある石崎は手先が器用であり、それまでの棟方は摺りまでを板画の仕事としていたが、多くの作業を行う板画本の制作に際しては、石崎に摺りを任せた経緯があります。

全体的に少しシミが見られます。





作家略歴 (五十音順)

永楽 即全 (16代永楽善五郎)

1917 (大正6) 年 - 1998 (平成10) 年
14代得全の甥15代正全の子。妙全の養嗣子。三井家・三千家に入入りし数々の名品を作る。茶道隆盛と共に現代の名工の一人に数えられる。

エミール・ガレ

1846年 - 1904年

19世紀末の工芸運動「アール・ヌーヴォー」その流れを代表する工芸家。フランス東部のナンシー生まれ。1889年と1900年のパリ万博で国際的な荣誉に輝く。

加藤 卓男

1917 (大正6) 年 - 2005 (平成17) 年
岐阜県多治見市生まれ。父 5代加藤幸兵衛に師事。古代ペルシア陶器の斬新な色彩や独創的な造形、釉調に魅力を感じ、西アジアでの長年の発掘研究を経て、滅び去った幻の名陶ラスター彩の復元をはじめ、青釉、三彩、ペルシア色絵など、高い芸術性を持つ異民族の文化と日本文化との融合に成功。平成7年に人間国宝に認定。

河井 寛次郎

1890 (明治23) 年 - 1966 (昭和41) 年
島根県生まれ。東京高等工業学校窯業科卒業後、京都市陶磁器試験場に入所。京都市五条坂に窯を築き作陶を行う。東洋古陶磁の技法による作品を制作していたが、民藝運動に関わり、実用を意識した作品に取り組むようになる。文化勲章、人間国宝、芸術院会員への推薦を辞退。

近藤 悠三

1902 (明治35) 年 - 1985 (昭和60) 年
京都生まれ。富本憲吉の助手をつとめ、昭和3年、帝展入選。40年、京都市立美大(現京都市立芸大)学長。52年、染付で人間国宝に認定された。

坪島 土平

1929 (昭和4) 年 - 2013 (平成25) 年
大阪生まれ。1946年、川喜田半泥子に師事。1963年、川喜田半泥子没後に廣永陶苑を継承。大阪高島屋にて個展開催、以降、東京日本橋高島屋と共に個展開催。

芹澤 銈介

1895 (明治28) 年 - 1984 (昭和59) 年
静岡市生まれ。東京高等学校図案科卒業後、生涯の師である柳宗悦と沖縄の染物紅型に出会ったことにより型染めを中心とした道に進む。1956年、人間国宝に認定。

濱田 庄司

1894 (明治27) 年 - 1978 (昭和53) 年
神奈川県生まれ。東京高等工業学校(現東京工業大学)窯業科に入学、板谷波山に師事。同校を卒業後は、河井寛次郎と共に京都市立陶芸試験場にて主に釉薬の研究を行う。この頃、柳宗悦、富本憲吉、バーナード・リーチの知遇を得る。大正9年、イギリスに帰国するリーチに同行、共同してセント・アイヴスに築窯。大正13年、帰国し、沖縄 壺屋窯などで学び、その後、栃木県益子町で作陶を開始。昭和30年、人間国宝に認定。

バーナード・リーチ

1887(明治20)年 - 1979(昭和54)年
香港生まれ。幼年は日本で過ごし、帰英後はロンドンでエッチングなどを学ぶ。1909年に再来日し、六代尾形乾山に弟子入りして陶芸の道を歩む。その後、柳宗悦、富本憲吉や志賀直哉ら白樺派同人と交友して日本の芸術の新しい動向に触れ、美術や陶磁器への関心を高めた。1920年、浜田庄司を伴って帰英、浜田と共に日本風の窯を築き、スリップウェアの研究と復活に努めた。1934年、再び来日し、益子や東京、布志名などの窯を巡り製作を。宗悦、河井寛次郎等と共に民藝の普及に尽力し、海外でも講演を行い、国際的な陶芸家の第一人者となる。

深見 陶治

1947(昭和22)年 -

京都生まれ。鑄込み技法による青白磁、立体作品で知られ、海外でも高く評価されている。昭和60年、「イタリア・ファエンツァ国際陶芸展」グランプリを受賞。東京国立近代美術館、大英博物館、メトロポリタン美術館などにコレクションがある。

松井 康成

1927 (昭和2) 年 - 2003 (平成15) 年
長野県生まれ。明治大学を卒業し、茨城県笠間市にある浄土宗月崇寺の住職の跡を継ぐ。その後、廃窯となっていた、山門下の窯を再興し、東洋陶磁の

研究を行う。栃木県の田村耕一に師事。練上手の技法を研究し、完成させ、昭和44年には、第9回伝統工芸総裁賞や日本陶磁協会賞などの数々の賞を受賞。平成5年、人間国宝に認定。

初代 真葛 香山

1843 (天保13) 年 - 1916 (大正5) 年
宮川長造の四男。長造没後、有栖川宮の勧誘と薩摩藩士小松帯刀の後援により横浜へ移住、大田村字不二山下(現横浜市港区庚台)に窯を築いた。真葛焼「真葛香山」と称した。万国博に出品していた事もあり海外にも多数の作品が存在し、大英博物館、ボストンミュージアムはじめ多くの美術館博物館にも所蔵されており、現代でも海外では「マクズウェア」と呼ばれ国内外で高く評価されています。

2代 真葛 香山

1859 (安政6) 年 - 1940 (昭和15) 年
横浜の陶芸家。本名半之助。帝室技芸員の初代香山を助け優れた作品を残す。大正5年、初代香山逝去後、正式に2代香山を襲名する。帝展・各美術展に出品した。板谷波山と並んで関東の美術界に君臨した。

棟方 志功

1903 (明治36) 年 - 1975 (昭和50) 年
20世紀の美術を代表する世界的巨匠の一人。日本の板画家。青森県出身。昭和17年以降、彼は版画を「版画」と称し、木版の特徴を生かした作品を一貫して作り続けた。